

新書紹介

三溪 原富太郎

白崎秀雄著

新潮社 B6判 三一九頁 一、四〇〇円

横浜本牧三溪園を抜きにして
横浜を知ることはいできない。

「西に桂離宮、東に三溪園」と
冒頭にあるように、一度でも三
溪園を訪れた者は、その偉観に
打たれ、日本の近代化の窓口と
いう先入観を瞬時に払拭し、横
浜にも伝統的な文化の拠り所が
あることを発見し、驚愕するに
違いない。本書はこの桂離宮に
比肩する文化財三溪園を自力で
造営した横浜の大実業家原富太
郎の伝記である。

本書には随所に意表をつく指
摘がある。例えば、三溪園が文
化財の単なる寄せ集めではなく、
原という芸術家の「ゆるぎない
理念の下に再構成された自然」
の中に絶妙に配置された芸術作

である。

それと同時に、戦前までの日
本貿易がいかに生糸貿易に依存
していたか、また横浜経済が生
糸貿易によっていかに雄々しく
日本経済を領導していたかに思
い至るだろう。

従って、本書は単に一実業家
のありきたりの伝記ではなく、
はからずも原という生糸商人の
偉大な足跡を辿りながら日本の
近代即横浜の創生期を振り返る
ことができる内容となっている。

それ故、横浜市が市政一〇〇
周年、開港一三〇周年を来年に
控え、コンベンション都市を目
指し「第二の開国」を迎えよう
としている現在、本書は多くの
示唆に富んでいる。本書を横浜
市職員の必読書として推したい
所以である。

原は一方で「文化の時代」を
も先取りしていた。彼こそ近代
日本の芸術家の代表的かつ理想
的パトロンであったからである。
三溪の後援した画家には下村観
山、横山大観、今村紫紅、前田
青邨、安田靉彦、小林古径らが
おり、他に佐々木信綱、夏目漱
石、和辻哲郎、芥川龍之介など

文人、学者らも三溪園に出入り
していた。

かの有名なインドの詩人・哲
学者タゴールが三溪園に逗留し
たことが機縁となって下村観山
の大作「弱法師」の模写がイン
ドに贈られ、画家荒井寛方が渡
印してアジャンタの壁画を模写
して帰ったという、いわゆる文
化交流も、原の後援により実現
したという。

原は単に芸術愛好家として古
美術蒐集をしたばかりでなく、
意外にも系統的に天平以来江戸
末期に至る日本絵画の代表作を
鑑賞し批評し研究した論文「三
溪帖ノート」を残しており、こ
れは独自ですぐれた日本絵画史
であり、芸術家としての一面を
物語っている。

原を評して「一つは芸術家ま
たは芸術愛好家としての純粋さ、
明晰さ。一つは実務家としての
周到さ、粘り強さ」の二元性を
もっていたという。
いずれにせよ、「日本は今や
経済大国となり、円の強さにも
世界中が一目置いてくるかに見
えるが、真に世界の尊敬を得て
いるであろうか」という疑問を

著者のみならず誰しもが持たざ
るをえない現状では、第二、第
三の原の出現を待望したくなる
うが、カリスマ的指導者の時代
は終焉したとなれば、市民一人
一人が日本固有の文化の深い造
詣に裏打ちされた国際感覚を身
に付け、「国際文化都市」を目
指す他ないだろう。

なお、本書は歴史的仮名づか
いで書かれているので、多少読
みづらいかもしれない。また、
三溪園の微に入り細をうがった
描写が相当あるにもかかわらず、
見取図や写真がないのが惜しま
れる。

〈神奈川県市民課 天野行雄〉